

縄文人の頭の中の本棚

望月昭秀 縄文ZINE

縄文人の頭の中の本棚を思うことがある。それは地元を中心とした歴史や芸術、大衆的なカルチャーのトピックにあふれていて、彼らの生活するご近所のことは大体把握できるようなそんな棚があって、それから料理からDIY、工芸などのモノづくり、狩りなどのテクニックに便利なライフハックや生活全般の棚。誰かが作ったごくごく個人的だけど面白い本、古今東西津々浦々から伝わってきた物語の棚だってだいふ充実していることだろう。少し奥まった方には神秘的で精神的なコーナーもあって、世界の不思議に対峙する時の作法や心構えのすべてが並んでいる。

もちろん縄文時代には文字も紙も印刷も本屋さんも無くて、本という存在を知ることはなかったわけですが、博物館に並ぶ地域性のある土器や土偶、現代にも通じるさまざまな生活の知恵を眺めると、彼らの記憶や知識や体験をそんなふうに想像することがある。

初めて八戸ブックセンターを訪れた時に思ったのは、ここの本棚は縄文人の頭の中に似ているのかもしれない、ということだ。もちろん似ているのは八戸に住む八戸の縄文人の頭の中の本棚だ。

ブックセンターの本棚には八戸、南部、青森濃度の高い本を中心に、本当に大切な地に足のついた生活の本。けして売れ線では無いけれど魅力的で、例えば夜の早かった縄文人たちがその長い夜に竪穴住居でみんなと語り合いたいような、そんな本が所狭しと並んでいる。

そんなこともあり、今年、僕の作っている縄文ZINEと八戸ブックセンターが協力して『土から土器ができるまで/小さな土製品を作る』という本を作れたこと、八戸ブックセンターギャラリー展「紙から本ができるまで/土から土器ができるまで」展(ややこしいタイトルですいません)と一緒にできたことは本当に嬉しかったのです。

次なる野望なんて言えば大袈裟だけど、それはブックセンターの本棚をもっと縄文人の頭の中に近づけたいということに他ならない。『土から土器ができるまで/小さな土製品を作る』は土器づくりの本だけど、石器づくり、竪穴住居づくりは必要だし、野草の本やキノコの本はあったかもしれないけれど、そういった縄文人の頭の中の本棚に並んでいるような本が見つかればいいと思う。縄文人も楽しんだらう近所の下世話なゴシップなんかも必要だ。そうやってさらにここの本棚の縄文濃度を上げていければと思う。もちろんいい迷惑なのは分かっている。

望月昭秀 akihide mochiduki

縄文ZINE

「土から土器ができるまで展」(2022)

1972年静岡県出身。株式会社ニルソンデザイン事務所代表。縄文時代専門のフリーペーパー「縄文ZINE」編集長。著書に『蓑虫放浪』(国書刊行会)、『縄文人に相談だ』(角川文庫)、『縄文力で生き残れ』(創元社)など。

